

# 卒業後の私

江口 祐樹 (平成26年3月文学部史学・文化財学科卒業)

## (1) 教職への道を歩みはじめた「決意と覚悟」

私は、高校教師である父親の姿を見て、漠然と教職の道を歩き始めました。そのような私に、教職の道を歩く決意をする出来事がありました。それは、ひとつの大切な命を失ったことです。高校生だった当時の私は、後輩の一報を聞いたとき、頭が真っ白になりました。その子の変化に何も気づけず、手を差し伸べることができなかったことを今でも後悔しています。そのときに、「絶対教師になるぞ。」と決意しました。

「なぜ教師になりたいですか？」

様々な理由があると思いますが、それを心に刻むことで教師としての揺るぎない軸ができると思います。

## (2) 特別支援教育は教育の原点

別府大学の教職課程を履修し、中学社会と高校地理歴史、高校公民の教員免許を取得することができました。大学卒業後は特別支援学校で3年間臨時講師として働かせていただいています。現在、特別支援の免許を取得中です。「特別支援教育は教育の原点である。」ということ聞いたことがあるかもしれません。子どものもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加するために必要な力を培う上で、実態把握が重要となります。これは、特別支援学校だけでなく全ての学校に通じることだと思います。本校には、様々な障害を有する児童・生徒が在籍していますが、実態がひとりとして同じ人はいません。ひとりひとりの実態を把握して個に応じた支援をしていく必要があります。

ゆっくりではあっても子どもたちの成長を肌で感じ、教師としてのやりがいを実感すると同時に教師としての責任の大きさを痛感しました。素直で何事にも一生懸命に頑張り、笑顔あふれる子どもたちと共に学び、共に涙や汗を流し、共に感動や悲しみを分かち合い、共に成長していくことができる毎日がとても楽しく充実しています。

## (3) 大切だと感じたこと

別府大学の卒業式前後、とても不安な気持ちでいっぱいでした。このような気持ちになっている人も多いと思います。私の教師としての最初の授業は、作業学習(農耕)の授業でした。緊張と不安でいっぱい子どもの前に立つ私をぎらぎらと輝いた眼差しで見ている子どもたちの顔を忘れることはないです。子どもたちにとって目の前にいる先生はみんな先生です。現場に入り、大切だと感じたことが2つあります。

1つ目は「学ぶ姿勢」です。私は、他の先生の動きを常に観察することから始めました。そして真似てみました。なにより、分からないことは素直に聞きました。自らの考えだけで行動するのではなく他者の意見を聞くことで、視野が広がり、自らの考えを深めることができることを学びました。柔軟性を持ち、学び続ける教師でありたいと思います。

2つ目は「あきらめない心」です。教師が諦めてしまうと、目の前の子どもの成長を止めることになります。教師は常に子どもを信じ、子どもに寄り添い可能性を伸ばしていく存在でなければならないことを学びました。

## (4) 教職課程履修のみなさんへ

幸いにも福岡県教員採用選考試験に合格し、平成29年4月から中学校社会科の教諭に採用される予定です。私事ではありますが、私に教職の道を照らしてくれた父親が今年の4月に亡くなりました。

ふたつの命を胸に刻み今後も教職の道を力強く歩んでいきます。

最後に再び聞きます。

「なぜ教師になりたいですか？」

その決心を胸に教職の道を歩むみなさんのご活躍とご健闘を願っています。

